

21世紀型スキル

「21世紀型スキル」とは、世界の大手IT企業の主導のもと教育関係者らが立ち上げた国際団体「ATC21s」(The Assessment and Teaching of 21st-Century Skills=21世紀型スキル効果測定プロジェクト)が提唱する概念で、これからのグローバル社会を生き抜くために求められる一般的な能力を指す。批判的思考力、問題解決能力、コミュニケーション能力、コラボレーション能力、情報リテラシーなど、次代を担う人材が身に付けるべきスキルを規定したもので、各国政府も知識重視の伝統的な教育から21世紀型スキルを養い伸ばす教育への転換に取り組み始めています。

21世紀

Liberal Arts

リベラルアーツ

リベラル・アーツ(liberal arts)とは、表現の原義は「人を自由にする学問」。それを学ぶことで自らを束縛から解放し、自らを陶冶していく。こうした考え方の起源は古代ギリシアにまで遡る。ギリシャ・ローマ時代に理念的な源流を持ち、ヨーロッパの大学制度において中世以降、19世紀後半や20世紀まで、人が持つ必要がある技芸(実践的な知識・学問)の基本と見なされた7科のことです。具体的には言葉にかかわる文法・修辞・論理の3つと数学にかかわる算術・幾何・天文学と音楽の4つ。日本語では自由七科(Seven Liberal Arts)ともいいます。日本では、第二次世界大戦前までの高等教育におけるリベラルアーツ教育は主に旧制高等学校にて行われたといわれています。

かえつ有明中高の石川一郎校長は、自校のめざすリベラルアーツについて、「これからの世の中で起こってくる問題は、従来の枠組みでは解決できないものばかりです。地球規模で見れば、環境問題やエネルギー問題、日本国内でも、少子化や高齢化社会の問題あるいは財政問題...こういった未知の問題に対処する上で大切になるのが、リベラルアーツ的な学びです。いわば普遍性を志向する態度だと言っていいでしょう。こういった態度が、やがて価値観の違う人とも通じ合えるプラットフォームを形成していくことになるのです。専門分野に進む前段階である中高時代に、このような人間形成をしていくことは非常に重要だといえるでしょう」と語っている。

ダイバーシティ

ダイバーシティ (diversity) とは「多様性」の意味である。学校教育の世界では、多様な国籍の子どもたちが通うインターナショナルスクールが「ダイバーシティな学校」といわれることがある。確かに、人種や国籍が多様な環境は、ダイバーシティの要素の一つであることには違いない。しかし、ダイバーシティの「多様性」の本質はそれだけではなく、「一人ひとりの個性に目を向けること」によって、容貌、価値観、志向、行動スタイル、能力……、これらの個性を理解し合って、それに合わせた生き方を可能にすることこそ、ダイバーシティ型社会のあり方で、それぞれが互いの強みを知り、どうすれば社会に貢献できるのかを理解して、お互いにサポートし合えば、価値あることを成し遂げられる、という考え方がある。

Diversity

47%

今ある仕事の47%が消える

英国のオックスフォード大学で人工知能などの研究を手がけているマイケル・A・オズボーン氏によると、今後10～20年程度で、約47%の仕事が自動化される可能性が高いという。つまり、約半数の職業が機械化される可能性が高いということです。

知れば、
選べる

